THE　DOGS　OF　WAR(戦争の犬)

谷　　直子

p.25-1

文明化以前の戦争＝ささいな、実体のないもの

未開の戦争の提案者→平和な社会が一般的で戦闘はときたま。

p.25-2

この視点が正しければ、民族誌や考古学の調査によって支持されるはず。

民族誌のデータ＝無国家社会は平和で古代・近代国家よりも戦闘に頼ることが少ない。

戦争への人的資源の動員もほとんどないと示されるはず。

考古学の証拠＝土着の国家が発展するか、外国から侵略される以前の、武力対立の証拠が少ないという復元がされるはず。

見た限り＝平和な社会の証拠はまれ。無国家社会で戦争が頻発。

部族社会で人的資源の高い割合を戦闘に動員

LEVELS　OF　SOSIAL　COMPLEXITY（社会複合の度合い）

p.26-1

人類学者によって社会の複合とサイズから分類に使用されている用語についてみておく。

バンド（bands）・部族制（tribes）・首長制(chiefdoms)・国家(states)・

文明(civilized)あるいは都市(urban)国家

人口のサイズと社会の多様な経済的政治的複合から述べる。

p.26-2

バンド＝小さくて政治的に自立した 20～50 人ぐらいのグループ。非公式のヘッドマンがいる。一緒に移動する広範囲の家族からなる。典型的なバンドは狩猟採集民か、採集民。マイクロ・バンドは毎年数週間集まって、儀式・祭り・求婚・結婚式の参列・物々交換をして、数百人のマクロ・バンドになる。マクロ・バンドは、言語によって区分され、dialect tribes として判断される。典型例は極北中部のエスキモーとアメリカ西部大盆地の Paiutes と中央オーストラリアのアボリジニ。

p.26-3

部族＝社会・政治組織を含む。汎－部族共同体を通して、数千人で一つの社会組織をなす。

共通した仮説・神話上の祖先の血縁をトレースできる血縁グループ。年齢階梯制や組合のような血縁でない共同体も含む。戦争のために結合する。ビッグマンやチーフと呼ばれる政治的リーダーは、フルタイムの政治的公務をしていない。影響力（≠権力）を行使。‘長老会議’や小首長の会議以外の政治組織なし。採集・牧畜・農耕経済がみられる。よく知られた例は、プエブロとマサイ。

p.26-4

首長制＝数千～数万の成員。公式でフルタイムの政治的リーダーによって組織される。住民は世襲制のランクや初期の社会階層によって分けられ、少人数の首長・貴族階級と大部分の平民によって構成

される。生産手段と剰余は再分配する首長の支配下で集められる。中心の政治構造が地方の共同体を統合。中心の政治構造は首長会議を構成するが、ヒエラルキーをヘッドの主張が支配。首長権へのアクセスは世襲制で、永久でマジカルな宗教的背景によって正当化。首長は人を服従させる権力の代わりに、マジカルで経済的な権力をもつ。典型例は、太平洋西海岸の部族・ポリネシアの社会・中央スコットランドのクラン・中央アフリカの小王国。

p.27-1

国家＝数万～数十万の人々の多数の共同体が一つの領域的なユニットをつくる政治組織

租税・賦役や戦争のための労働力を徴収。法律を制定。中央政府を持つ。独占的

権力を持つ政治ユニットであり、独占された権力は警察・軍事力へ制度化。

文明国家は都市と記録（普通は文書）をもつ。

p.27-2

未開＝人類学では技術的な問題とされた。社会的用語としては社会の問題とされた。ネガティヴな意味があるので、新語に置き換えられた。ここでは、相互換的に使用する。

IS　WARFARE　UNIVERSAL？（戦争は普遍的か）

p.27-3

最も極端な視点によると、戦争は人間存在固有のもの。人類の社交性の悪用。国家と文明の政治構造の集中化によって作り出された。

戦争に関する通文化研究によると、戦争に従事しないか非常にまれな社会もあるが、大部分（90～95%）の社会はこの活動を行う。

p.28-1

部族から国家社会のサンプルを提示した通文化研究で一貫した結果が出た。ある社会の 50 個のサンプル中５個が攻撃的･防御的戦争にもまれか全く従事しない。そのうち４つは戦争から避難するために隔離され、武力衝突から守られた（避難民≠平和主義者）。カリフォルニア・インディアンやシエラネバダのモナチはまれに戦争に行く。この調査結果から、90%の文化が戦争に従事。10%も武力衝突と無関係ではない。

p.28-2

他の大規模な政治衝突に関する通文化研究では、90 個の社会のうち 12 個（13%）が戦争にまれか全く従事しない。そのうち６個は部族・民族的マイノリティーで近代国家の管理下にある。３個は農耕部族で地理的に隔離された環境下で生活。残り３個は移動する狩猟採集民。これらはみな隔離されるか、避難民か、近代国家の‘王の平和’のもとで生活、あるいはその両方。

p.28-3

西部の北アメリカインディアンの部族とバンドの研究では、157 グループ中 13%が襲撃を行わないか、全くまれ（一年に一回以下）。この 21 個のうち 14 個は数年に一回襲撃行為をした証拠がある。のこり 7 個が全く襲撃や戦争に従事していない。これらはすべて移動するバンドで、隔離されたところにすんでいる。最も平和なグループ＝距離や土地の困難さにより隔離されている。

p.28-4

移動性があり隔離された狩猟採集民も普遍的な平和主義ではない。アボリジニの採集民は常習的な襲撃者。狩猟採集民の平和＝社会の単位が小規模。私たちの戦争の定義に暴力の多くが含まれない。小グループ内での暴力→争い・復讐・殺人

p.29-1

民族学者によって戦争に従事しない小規模バンド→高い殺人の割合

カラハリ砂漠のクン・サン（ブッシュマン）‘ 罪のない人々 ’ という民族誌。

1920～1955 年の殺人の割合はアメリカの 4 倍。1950～1960 年代の主要な産業国の 20～80 倍。ボツワナ警察設立以前には、バンド間や牧畜民のツワナに対して襲撃や長期の争い。

コパー・エスキモーもカナダ騎馬警察が鎮圧する前は、高レベルの争いや殺人。今世紀初めファースト・コンタクトをとったとき 15 家族の成人男子はみな殺人に参加。他の小規模バンドと高緯度極北のエスキモーもこのパターン。ネトシリック・エスキモーの殺人の割合は、カナダ騎馬警察が鎮圧した後でも、アメリカの 4 倍。近代ヨーロッパ国家の 15～40 倍。ヤグハンはカヌーで移動し、生物学的な家族による独立した政治ユニット。19 世紀後半の殺人の割合はアメリカの 10 倍。武装衝突＝低レベルの社会統合でも消滅しない。殺人や殺害とした用語上の虚偽。

p.29-2

リチャード・リーとマービン・ハリス

単純な社会を私たちの世界と比較して、平和主義の性質と定義。

‘ 実際の殺人割合を偽っている意味論の虚偽 ’

ニューギニアのゲブシ

アメリカ軍＝９年間で南ベトナム全体の人口に近い人々を殺した。

内部殺人の割合はゲブシの殺人と同等。

ブルース・ナフト＝非常に特殊な場合に限り、現代の大量殺戮は、ゲブシの殺人の割合と同等かそれを超える。

内的なグループでの暴力を戦争でないとする＝平和な社会を作り出す意味上の虚偽。

p.30-1

‘ 平和な ’ 狩猟採集バンドが実際の武装衝突に参加していたら、本当に平和主義か？

ポラー・エスキモーの例

19 世紀はじめ、200 人ぐらいの小さなバンド社会。氷によって完全に長期間隔離されていたので、1819 年にヨーロッパ人の探検家が接触するまで、存在を知られていなかった。

不安定な生計を拡大するので、争いや武力衝突を避ける。外部の人間と接触するようになっても、非常に友好的であった。←西洋文明に接触すると平和な部族民がホッブス主義の狂戦士になるという理論に対する反証。

p.30-2

その他の平和な狩猟採集民の例

中央アフリカの熱帯雨林の Mbut・ピグミーとマレーシアの Semang

どのような武力衝突も完全に避けようとする（ピグミーは周辺の農耕民に政治・経済的に依存)。西オーストラリアのアボリジニ Marddjara は暴力に従事して、防御施設や武器を特化させているが、戦いや殺戮に拡大しないし、その言葉ももたない。
大盆地のバンドも他者を攻撃するよりも逃走する。こうしたグループは例外的。
通文化研究のサンプルでは、主要な狩猟採集民は戦争に従事しており、平和主義ではない。
p.31-1
平和主義の社会にもそれぞれの社会レベルと経済複合がある。
通文化研究によると、
平和的農耕グループ＝避難民・国家によって管理された民族的マイノリティー・警察や植民地主義の国家などによって平和化された部族。
p.31-2
よく知られた平和な農耕民＝マレーシアのセマイ　どのような形の暴力もタブー
1950 年代のマレーシアにおける共産主義者の暴動の際、対ゲリラ活動の斥候として補充された。他者を殺すことに深いショック←ゲリラが血縁者を殺した後には熱狂的戦士に。
セマイのベテラン兵士の回想
動員を解かれて村に帰ると、全く平和的な生活を続けた。
低密度で定住し、未使用の土地が豊富にあったので、暴力からにげる選択が可能。
しかし、彼らの暴力を嫌うという強い道徳が平和維持のために重要。
p.32-1
平和な社会は産業国家にも存在する。スウェーデンとスイスはここ 2 世紀の間戦争に従事せず、殺人の割合も世界中で最も低い。
スイス＝背後を山脈によって地理的に隔離。
スウェーデン＝伝説的に戦争好きのヴァイキングの故郷。18 世紀までは戦争好きの社会の一つ。1815 年から戦争をしていない。
両国とも伝統的に軍事力は保持しつづけたまま。
先天的に戦争好きの国家など存在しない。
p.32-2
平和主義社会＝多様なレベルの社会組織に存在。まれであり特別な環境による。
スウェーデンとスイスの例＝社会が平和的⇔戦争好きと変化
グループ間の武力衝突＝人類社会が悪であることの必然的結果。
主要な社会は戦争をし、必然でなくとも普遍的に共通で普通。

THE FREQUENCY OF WARFARE IN STATE AND NONSTATE SOSIETIES （国家と無国家社会における戦争の頻度）

p.32-3
どのように未開の戦争は頻発するか？無国家社会は国家・文明社会より戦争に従事しないのか？という質

問は、未開の戦争がどのようなものかと関連。

通文化史研究にもどると、未開の戦争の「神話」が事実ではないと分かる。

p.32-4

三つの通文化史研究＝戦争の頻度のデータ

未開社会に戦争が頻発しているという結果。

50 個のサンプル中、66％の無国家社会が戦争を継続（毎年行う）。国家ではたった 40％。

戦争→国家社会のほうが少ない。

90 個のサンプルでは、政治的な複合の強大化に沿って増加することを示す。

77％の国家が年１回戦争を行い、部族や首長制社会では 62％にこの傾向がある。

70～90％のバンド、部族や首長制社会がここ五年間で戦争を行う。国家では 86％。

他の調査では、約 75％の先国家社会が戦争に移行。

‘ より専制的な国家によって平和化・統合化されていない人々が戦争を行い、’‘ 単純なバンドや部族社会より、複合化した社会のほうが ’ 戦争が頻発するとはいえない。

アメリカ西部のインディアン＝完全に無国家社会。毎年 86％が襲撃するか、それに抵抗している。高頻発の戦いは北アメリカでは珍しくない。

ニューギニアの Dugum Dani の部族では、５ヵ月半で７回の戦争と 9 回の襲撃。

南アメリカのヤノマミの村では、15 ヶ月間に 25 回の襲撃。

無国家の大部分が戦争を数年ごと、各世代ごとに行っている。

高頻発で継続的な戦争は国家と同様に部族社会の性格。

p.33-1

先国家の高頻度の戦争は文明国家のそれと対照的。

初期ローマ共和国＝20 年間に１回戦争に着手あるいは攻撃。

後期ローマ共和国や初期帝政ローマでも６～７年に１回戦争。ほとんどが市民戦争と地方の反乱。

帝政ローマのほとんどの市民は戦争に巻き込まれず、数世代に渡って「ローマの平和」。

p.33-2

1800～1945 年までの歴史的データによると、近代国家が戦争を行う頻度は 1 世代に 1 回。

戦争の持続量を見ると、近代国家の平均は 19～20 世紀初めまでで５年に 1 回。

イギリスやスペイン、ロシアなどの好戦的な国でも毎年継続することはない。

無国家社会では 65％の戦争が継続的。77％が５年に 1 回の戦争。55％が毎年戦争をする。

87％が一年に一回以上闘う。75％が２年に１回戦争する。

未開社会は現代社会より平和ではない。

戦争は、国家社会とくに近代国家よりも、無国家社会に頻発している。

MOBILIZATION（動員）

p.33-3

非公式で自発的な戦争への徴兵は、仮定上、部族社会の性格として引き合いに出される。

←未開が文明での戦いと比べて、重要性と効果を欠如している証拠。
戦争が重要な活動として維持されるなら、未開社会は彼らの強さの全てを集める。
p.34-1
２－１表＝戦争の部隊や軍のサイズと社会ユニットの男性人口の関係図。
無国家社会の多くで、13～14 歳の男子は潜在的兵士（戦争や襲撃にすべてさんかするわけではない）。部族の軍隊の形態は‘全てボランティア’←国家のボランティア軍事力と似る。
現代の徴兵された軍隊＝男性人口の％
無国家社会＝人的資源の高い割合。
p.34-2
動員はどの社会でも完全ではない。
若すぎる・老人・病気・気質が合わない→戦争のストレスに耐えられない。
ほとんどの社会＝労働の性的区分によってことなる仕事に習熟。
男手を奪われると社会経済は支えていくことができない。
女性でもできるが技術を上げるに時間がかかる。
p.35-1
女性が戦闘に従事することはまれ。動員や兵站の援助的な役割を担うことはしばしば。
戦闘前に激励のダンスに参加する。
いくつかのグループでは、食料や武器輸送のために従軍。戦闘の際は救急措置や敵の飛び道具集めをする。
いくつかの場合、選択的・必然的に女性も戦う。南アメリカ北部では普通。
一般には、女性の役割は、家の保持、菜園や家畜の見張り、負傷者の看護。
普通、戦争は男性の仕事。
p.35-2
文明戦では軍隊組織に備え、供給するために、巨大な人的資源が必要。
２－１図は近代戦時国家の高い‘戦士’の割合は、動員された男性の一部分だけが戦闘に従事するという事実を偽装している。
ナポレオン軍では、58～77％の兵士が‘戦闘員’。残りは訓練を受けたり、守備隊であったり、補給部隊である。
第二次世界大戦中アメリカ軍のたった 40％が戦闘部隊に配属された。他は、隔離や兵站の支援や訓練に配属される。さらに少ない割合の人がライフルを持ったり、軍艦や軍用機を動かしたりしていた。
ベトナム戦争時のアメリカ軍全体の戦闘部隊と支援部隊の比率＝1:14（現在は 1:11）
近代国家の軍隊は動員した人的資源全体が戦闘に従事しているわけではない。
この現象は近代の軍隊が扱う地理的規模が巨大で、複合化された技術があることの反映。
古代の軍隊と未開の戦闘部隊は、ほとんどの参加者が戦闘員。
無国家社会の男性は、近代国家の平均的な男性より多く戦闘に直面する。
人的資源の動員の尺度で見ても戦争は部族より国家に重要とはいえない。

p.36-1

PREHISTORIC　WARFARE（先史時代の戦争）

先史時代を見ると、歴史的・民族誌的調査を見ても戦争の存在を示すものは何もない。

200 万年の先史時代の中で、暴力や武力衝突の証拠を探る試みは困難。

考古学的に世界の大半はよく知られていない（例外はヨーロッパ・近東・アメリカの一部）

明確な武力衝突の証拠＝武器による外傷のある人骨と防御施設。

死後埋められた人間は 15 万年前からで、それ以前は、遺体は動物や自然の力で乱され、破片となっている。

15 万年前以降でさえ、火葬や風葬のように、先史時代人は遺体を様々に処理してきた。

石や骨を先端につけた武器の使用は、偶然の外傷とは区別される。

武器の使用は過去４万年前からで、現代まで多くの地域で、腐りやすい木や竹の槍や飛び道具が使用されている。

永続的な村ができて防御施設がつくられるが、人類が定住するようになったのは、過去１万４千年間のことで、永続的な村がほとんどの地域で一般的になったのは、農耕に適応してからである。

こうした制限の上で、考古学的証拠から先史時代の平和主義について何が言えるか？

p.36-2

殺人の証拠は人類自体と同様か、ホモ属と同様に古いと論じる。

初期の殺傷人骨は、その後の調査で殺人以外の理由であるか、事故と区別がつかないとされている。

南アフリカのアウストラロピテクスの頭蓋骨の一対のやり傷＝豹や犬による噛み傷。

ネアンデルタール人の人骨の怪我や破損＝暴力によるものか判断できないが、生活が過酷であったためであろう。

p.37-1

殺人の決定的証拠は、3 万 4 千年～2 万４千年前の中・西部ヨーロッパの初期現代人の埋葬。

イタリアのグリマルディ＝オーリニャック期の子どもの脊柱に刺さっていた。

南フランスのオーリニャック期の頭蓋骨＝頭をはがれたカットマークがある。

チェコスロバキアの上部旧石器時代＝武器による傷、成年男子の頭蓋骨骨折の跡、男女と子どもの多量埋葬→武力衝突による死

エジプトのナイル谷＝石製のポイントが腹部に刺さり、他のポイントが上腕に刺さる。

p.37-2

エジプト領ヌビアの Gebel　Sahaba の後期旧石器の墓地で見つかった人骨は戦争が一般的で残虐だったことを示す。

墓に埋められた男女と子ども 59 人中、40%以上に石製のポイントが刺さる。

成人には 20 箇所ぐらいの多様な傷があるものもあり、子どもの傷は頭か首にある。

調査者の Fred　Wendorf は埋められたうち、半分以上が暴力を受けて死んだと判断する。

多くの成人の前膊骨に骨折の治癒痕があり、墓が数世代に渡り使用→暴力的殺人は一度ではない

p.38-1

西ヨーロッパ中石器の最後の狩猟採集民の遺跡で暴力による死の証拠

ドイツの Ofnet 洞窟の例＝‘ 戦利品 ’の頭蓋骨が‘ バスケットの中の卵 ’のように置かれていた。34 体の男女と子どもの、体から切り離された頭蓋骨。
多くの頭蓋骨に石斧による穴。

p.38-2

暴力による死と防御施設→新石器時代に西ヨーロッパに浸透。

狩猟民が農耕民になってから本当の戦争が開始されたという考古学者もいる。

この間違った視点は、ドイツの Talheim とフランス南東部 Roaix の新石器時代の大量殺人によって支持された。

Talheim＝18 体の成人と 16 体の子どもが大きなピットに投げ入れられる。頭蓋骨を 6 種類の斧で打たれて殺されていた。

Roaix＝各世代、各性別の 100 人以上の人の骨と鏃が一緒に埋まっていた。

西ヨーロッパの多くの村では溝と杭で防御施設が構築される。イギリスの広域調査で、弓を使う敵に、攻撃され、突入され、焼かれたことが分かる。

ヨーロッパ新石器時代の初期農耕部族と小首長制も平和ではなかった。

p.38-3

歴史的に血塗られた近東では初期新石器時代には武力衝突の証拠は少ない。イエリコ（初期新石器）。

後期新石器時代と青銅器時代に一般的。

p.38-4

アメリカで考古学的精査が集中的に行われた地域＝南西部・カリフォルニア・西海岸・ミシシッピ川流域。

防御施設＝先史農耕民がミシシッピ川流域と南西部、定住採集民で西海岸。

先史時代の新世界＝旧世界と同様に戦争の犬たちがほとんど皮ひもでつながれない場所。

p.39-1

いくつかの時代では、先史時代の無国家社会は普遍的に平和。

考古学的証拠からは 1 万年前から戦争が記録に残る。

次章では、考古学的証拠が民族誌を支持していることを明らかにし、先国家の戦争の原因を明らかにする。

p.39-2

小規模の社会が、文明社会より戦争がまれで深刻でないと簡単に証明できない。

一般に先国家社会の戦争は頻発し、重要。

文明国家の市民の平均よりも、バンド・部族・首長制の成員にとってのほうが、平和は不十分な日用品かもしれない。